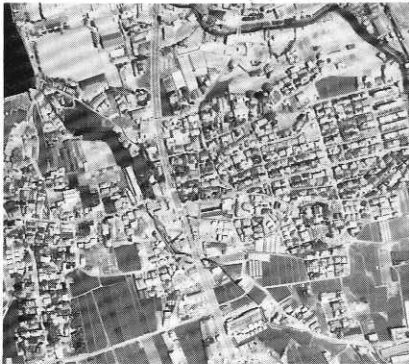


古地図

＝浅倉コレクションを中心に＝

(企画展
7月27日～9月24日)

▶青木村絵図と現在の青木(三島市)



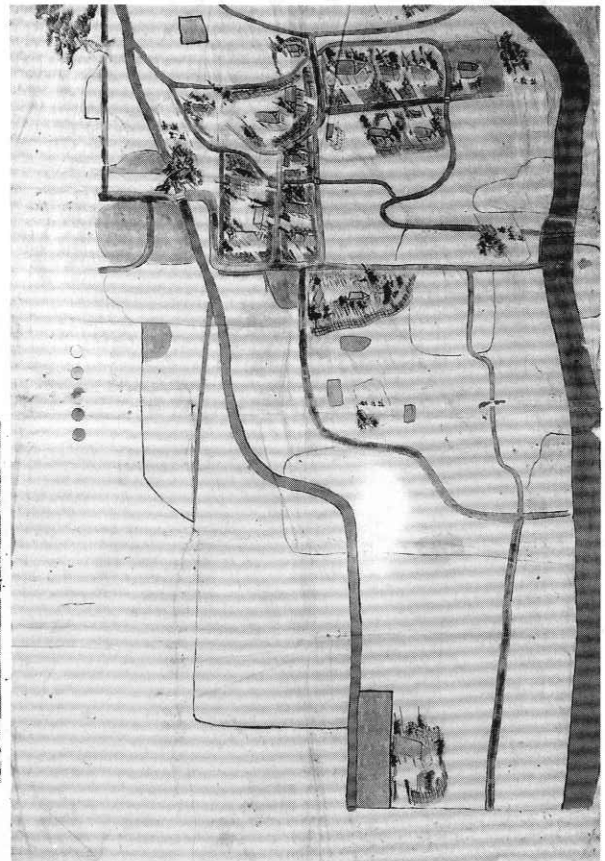
榛原町に住まわれた故浅倉清氏は、長年にわたり古地図の研究と収集にあたられました。郷土館では、膨大なコレクションから、日本の地図の変遷を展示し、郷土の近世村絵図の発掘にも努めました。

1. 日本の地図の移り変わり

「行基図」と呼ばれる国名と街道しか入らない簡略な日本図が中世以後長く使われてきましたが、日本が統一され江戸時代に入ると一変します。精緻な国絵図を基に日本国図が作製され、日本の国土が正確に把握されていきます。測量技術の進歩と共にその精度は増し、ついに世界に誇る伊能忠敬の実測日本地図が完成されるに至ります。(1821年)

又、浮世絵の手法が地図にも生かされ、石川流宣「日本山海道図大全」は採色をほどこし、多くの情報が盛り込まれ人気を博しました。時代と共に絵師達の独創も冴えを見せ、鳥瞰風に日本を描いたもの、東海道を装飾的にアレンジしたものが出現します。

一方、都市の隆盛と共に都市図も作製され



始め、江戸図は種類・発行枚数とも他を抜きん出ていました。江戸後期には手近に使えるよう「江戸切絵図」も発行されました。

郷土に転じて見れば、富士山をテーマにした絵図が多く、殊に立体地図「富士之嶽」はユニークなものです。又、幕末、外国船の来航を機に国防と領土意識が高まりました。伊豆七島を中心とした沿岸図が多く描かれ、中に、黒船と異人が描かれているものもあります。外国船に対する異怖が伝わってきます。

2. 村絵図

村絵図は検地や村明細帳の差出の時、あるいは土地論争裁許状に添えられたり、主に支配者の意向で作製されました。

道路・水路と屋敷地だけの簡略なものから戸主の名まで記入された詳細なものまであります。どの絵図にも水路がきっちり描き込まれているのは、農業に欠くことのできない水が大切に扱われていたことを物語ります。

島の民俗

(企画展「伊豆七島写真集展」より)
平成2年7月1日～31日)

かつて、伊豆七島は伊豆の国の内であった。黒潮のまっただなか、永い間、島の生活は昔と変わらない素朴そのものであり続けてきた。島の特産品の天草や石材を頭上運搬する島の女性達。そのシルエットは、南方の民族を想像させる。

ここでは、撮影者、故河辺武がとらえた七島の民俗を集めてみた。

(写真の説明は河辺氏自身による)



▲新島

新島婦人の働く時の姿

▶新島

石を運ぶ婦人達

島の婦人は皆力がある。男達の真似の出来ない仕事を婦人達が皆片付けて行く。山から切られて来た石はこの様に婦人の頭に乗せられて波打ち際まで運ばれ、船に積まれる。



●河辺武と伊豆七島写真集●

河辺武は、大正9年河辺家の次男に生まれ、昭和13年沼中（現沼津東高等学校）を卒業しました。中学時代からカメラに熱中していました。蒲田の映画撮影所でカメラマンの弟子になったこともありましたが、当時日本は軍国主義のまっただなかで、15年の暮れには現役で入営も定められておりましたので、郷里三島に帰り、郵便局に勤務しながらカメラを楽しんでいました。年来の伊豆七島のカメラ行脚の希^{のぞ}みも捨て難く、5月半ばから6月末にかけて七島を巡り、思う存分撮りまくりました。ある島では、若僧が舶来のカメラを二つも肩にかけているので憲兵隊にスパイと疑われ、ネガ全部を現地で現像させられた為、予定日時が延び、旅費を使い果たしてしまい、金送れの電報を打ってよこしたこともありましたが、やっと帰ってきて、それから入営まで心ゆくまで焼き付け、引き出し等して71枚の七島巡りをまとめました。（その後）入営し、ガダルカナル島で報道班として活躍中戦死しました。（「伊豆七島写真集」）は、彼がこの世に残した、ただ一つの記念の品であります。（以下略）

(河辺 佐紀枝)



◀式根島

宮川たと燈台

島で生まれて島で育った老婆は、島の近くで度々漁船が難船し幾多の生命が亡くなったのを悲しみ、この島に燈台があったらばと思ひ、私費で、新島の石屋を頼み、山を開き、石段を作り、燈台と観音様を建てた。それ以来毎日老婆は八十六才の身を燈台の燈を付けに幾段もの石段を毎日上り下りした。

太陽に照らされた、老婆の顔は実に神々しい程である。

▼八丈島

島の物置小屋

風や、ねづみの害を少くする為、四本の柱を立て、その上に小屋を作る。島だけにしか見られない小屋である。



▲三宅島

島下部落の娘

神着村から坪田村に行く途中甘軒位の部落がある島下部落がそれだ。然し、現在は、今年七月の噴火でもって溶岩の下に埋もれてしまひ、永久にその姿は亡くなってしまった。故に現在では島下と云ふ部落は亡いのである。

贅川文書の整理

昭和63年10月22日から平成元年1月30日の会期で開催した企画展「ふるさとの人物＝吾山・他石展」の際、他石（贅川邦作）の末えいにあたる贅川真彦氏（鎌倉市在住）より贅川家に遺された他石の資料及び贅川家が名主役を務めていた駿東郡的場村（現在清水町の場）の関係の古文書史料等を多量にご寄贈いただいた。郷土館では、この多量で種々雑多な寄贈資料を、とりあえず「贅川文書」と称し、その整理にさつそく取りかかった次第である。

資料は大部分が他石こと贅川邦作（明治元年～昭和10年）の俳諧関係資料で占められていた。的場村の名主の贅川家に生れた邦作は後に当地域の政財界の重鎮となる一方、孤山堂他石を号し俳諧をよくし、「鳴鶴集」という俳諧誌の編集責任者として活躍するなど、

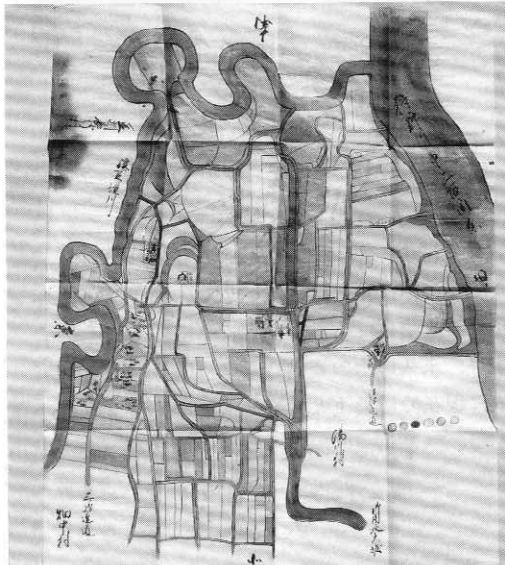
彼の業績や評価は文化人他石として知られることの方が多かった。したがって資料には初期「鳴鶴集」をはじめ種々の俳諧関係誌及びこれに関係した他石自身の草稿や全国各地の俳諧同人達のハガキ、書簡が中心となっている。しかし資料数量が余りにも多く、難解であるために、現在まだ整理続行中である。

上記他石資料以外に、彼の生地生家である的場村贅川家の古文書が多い。的場村は江戸時代には旗本大河内氏、同内藤氏、紀州渥美氏、同丹羽氏等の相給知行地だった。贅川家はそこの名主役を務めた家柄だった。約500点の近世村方史料は、的場村及び周辺の村々の昔を知る上で貴重な文書と言えよう。

ここでは的場村史料の中から何点かを取り出して紹介し、「贅川文書」整理の中間報告としたい。

的場村

駿東郡清水町の場は狩野川下流右岸と境川（伊豆と駿河の境を流れる小河川）との合流地点に位置する。的場という地名は小河泉水神社（湯川）の神事である的場に因んで付いたものと伝えられる。村名は江戸期から明治22年までのもので、以後は的場等13ヵ村を



◀ 的場村絵図

合わせた清水村に属し、昭和36年より清水町となった。

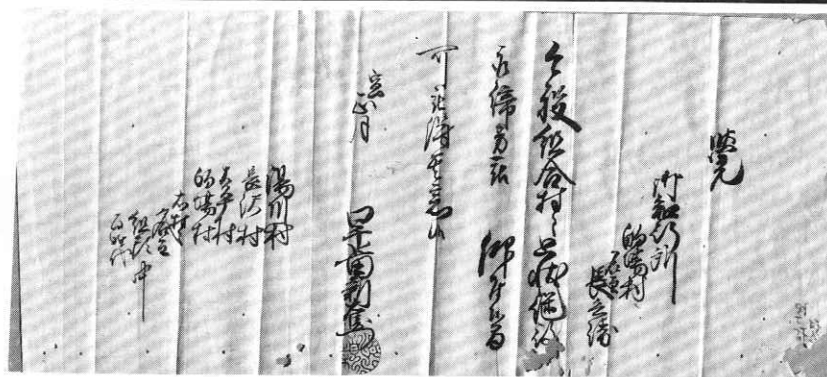
贅川文書の「水帳（駿州駿東郡的場村検地水帳写）」（延宝二年甲寅三月朔日～1674）から江戸期の的場村の村高を調べてみた。

村高

総村高 304石2斗5升7合
 （田畑屋敷25町9反1畝19歩）
 内 訳 水田分米289石8斗2升6合
 （23町9反3畝25歩）
 畑地分米12石2斗8升1合
 （1町7反5畝9歩）
 屋敷分米2石2斗5升
 （2反2畝15歩）

▶ 「水帳（駿州駿東郡的場村検地水帳写）」





的場村の総村高は以上のものであるが、この高を知行4家によって分割しているので御領所分（大河内善兵衛分）の高はわずか70石2斗1升5合（田畑屋敷共）となっている。知行4家の取高は次のようになる。

支 配

内藤筑後守様分 高140石
 渥美源五郎様分 高 47石 2升 1合
 丹羽金十郎様分 高 47石 2升 1合
 御領所分 高 70石 2斗 1升 5合
 （大河内善兵衛様分）

駿府紺屋町に役所を持つ旗本大河内善兵衛分については御領所となっていることから筆頭知行家であると考えられる。この大河内家から贄川家の主長兵衛は「廻状継役取締方」の任命を受けている。すなわち的場村及び周辺村々の筆頭名主としての地位を認められたのであった。

それは次のような書状である。（写真上）

覚

御知行所
 的場村名主
 長兵衛

今般組合村々廻状継役
 取締方被仰付候間
 可被得其意候

寅正月

早苗新右衛門 印

湯川村
 長沢村
 大平村
 的場村

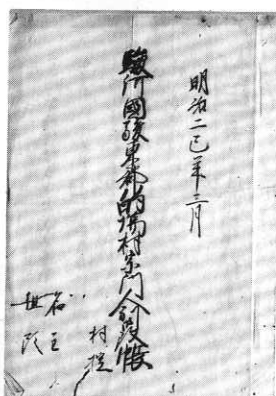
右村々名主

組頭 中
 百姓代

戸 口

次に的場村の家数と人口であるが、明治二己年三月（1869）の「駿河国駿東郡的場村宗門人別御改帳村控」によれば、次のようであった。（写真下）

惣家数合16軒 内 本百姓 6軒
 水 呑 6軒
 無 高 4軒
 人別合67人 内 男 37人
 女 29人
 僧 1人
 下男・女 9人



「駿河国駿東郡的場村宗門人別御改帳村控」

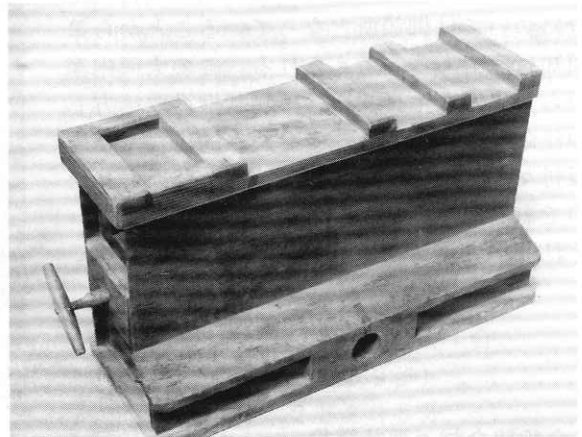


収 集 資 料 紹 介

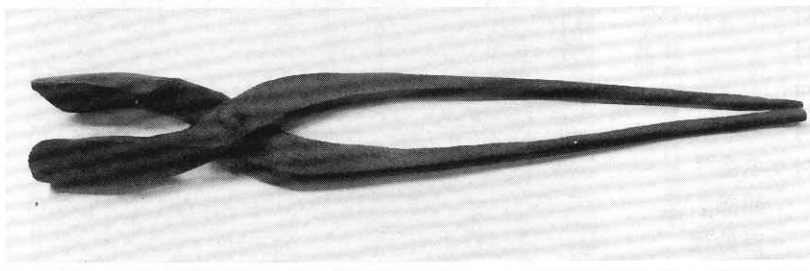
氏 名	住所・電話番号	受入年月日	資 料	点数
上田 歓泰 氏	三島市幸原町 2-7-4 5	H2.5.28	三島町全図(1)、伊豆国分寺がらん配置図(1)、伊豆国分寺僧堂跡出土碗(1)、国分寺拓本(1)	4
山田 亨 氏	三島市加屋町 (町内会)	H2.8.7	山車の車軸	1
早坂 重美 氏	長泉町下土狩 3 5 0-1	H2.8.19	ケラ(1)、ツマゴ(2)、ワラグツ(1)、ワラジ(1)、脚半(1)、藁のスリッパ(2)	8
樋口 晴子 氏	三島市栄町 2-2 6	H2.8.27	ヒナ人形一式 (大正15年)	一式
三和銀行(三島支店)	三島市中央町 1-3 6	H2.9.18	明治6年「田子の浦」の写真(複写)	1
瀬川 勇 氏	三島市一番町 9-4 4	H2.9.26	火アイロン(1)、和裁用こて(3)、着物型(3)、和裁用曲尺(1)、へら(1)、ローソク立て(1)、灰かき(1)、陶製かさね鉢(1)	1 2
室伏 成久 氏	三島市谷田 3 5 6-2	H2.10.21	ファイゴ(1)、ハサミ(3)、セットウ(1)、ヤジメ(1)、ゲンノウ(2)、ピシヤン(1)、両刃(1)、発破ノミ(2)、荒彫ノミ(3)、仕上げノミ(1)、矢(5)、道具箱(1)、テコ(1)	2 3
山本 為良 氏	三島市大宮町二丁目 5-7	H2.11.26	壘 (アジロタタミ)	1
川島 かほる 氏	三島市中央町 4-1 4	H2.11.30	タンス	1
前島 一 氏	三島市大宮町二丁目 9-3 6	H2.12.1	絵入東海新聞・明治20年(34)、外(目録作製中)	多数
伊達 英一 氏	三島市中島 3-1	H2.12.1	古書(明治初期医学書等)(目録作製中)	多数

石 工 の 道 具

企画展「石と生活展」(平成2年11月23日～3年2月11日)に出品協力してくれた室伏成久氏から、石工道具をそっくりご寄贈いただきました。室伏氏の先代は、谷田で、谷田石を切り出し、それを加工していた石工だったそうです。ファイゴや鉄バサミなどの手作りの石工道具に、道具を命としていた職人の心意気を感じます。



▲**ファイゴ** 火づくりする時に風を送り火をおこす道具で、手で操作した。燃料はコークスを使った。



◀**ハサミ**

火づくりする時に焼きいれするものをはさむ道具で、挟み易いように先が工夫されている。自分で作った道具である。

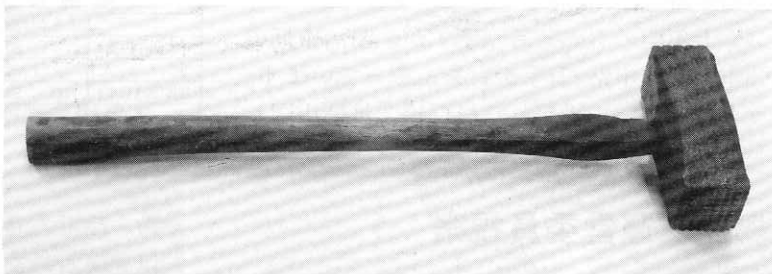


◀セツウ

片手ハンマーである。セツウでノミを叩きながら石をけずったり、コヤスケを叩いて石のこぼをけずるなどをする道具。

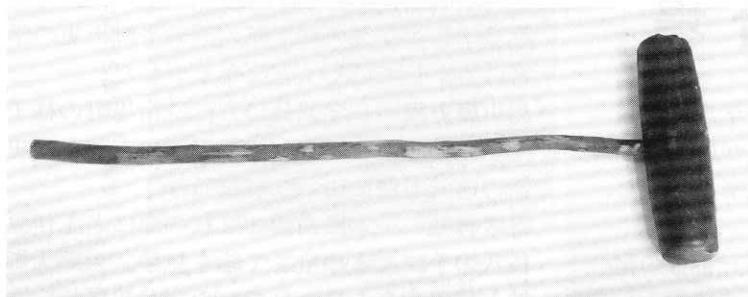
ビシャン▶

石の面を滑らかにするために叩く道具である。ビシャンの叩き面にはピラミッド型の山が碁盤の目のように並び、この目の多少によって名称及び使用法が異なる。山の数が少ない下のは、鬼ビシャン(25)、中間に八枚ビシャン(64)、細かいものになると百枚ビシャン(100)がある。



◀ゲンノウ

大型ハンマーで、ふつう源翁という字を当てる。柄には弾性がある材が使われ、アヤメガシ、ハンノキ、ビンカなどの樹種を使う。ウシゴロシ(牛殺し)などの通称もある。柄のたわみぐあいをやかましくいう。

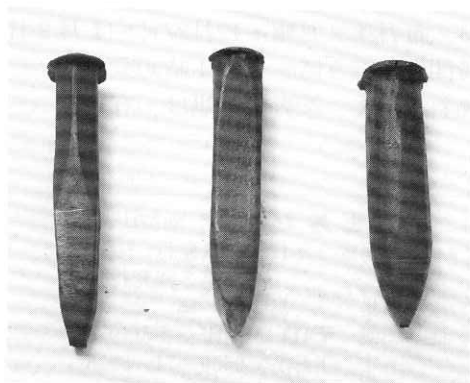


▼ヤ

一種のクサビで、石材を節理に沿って割るのに用いる。大小各種をそなえ、用途によって使用を異にする。小型のものをマメヤと呼ぶ。ヤの入る穴を一直線に点々とノミでうがち各穴にヤを入れ、ゲンノウと呼ぶ大型のハンマーで適度に打撃すると、石材はヤを入れた穴の線に沿って割れる。

▼ノミ

鋼製のふつうのタガネ。形式も大小各種がある。これを片手に握り、セツウで打ちながらはつてゆく。



梅御殿 装飾絵画展

5月20日～7月1日

今年は楽寿園の地に小松宮彰仁親王が別邸を造営されて100周年にあたります。(明治23年造営)

郷土館では楽寿園の記念事業に協賛して、当時小松宮が建築された現在未公開の「梅御殿」を飾った日本画(杉戸絵・襖絵・屏風(一部緒明家所蔵))の展示を行ないました。

作者不明のものもありますが、明治中期の日本画壇の中堅・若手が力をふるっています。故事に基づいて描かれた杉戸絵「足柄山図」

や「司馬温公図」等、銀箔もまぶしい花鳥画の襖絵「梅に金鶏図」、屏風絵「梅に雉図」など雅びな世界が広がりました。

梅御殿の装飾絵画は初公開だけに、市民の関心も高く、特に楽寿園の昔を知る年配の方々が多く鑑賞に見えました。

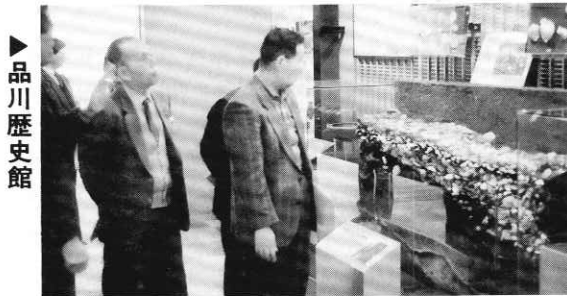
	5月20日～31日 (12日間)		6月1日～30日 (29日間)		7月(1日間)		計(42日間)
	小人(小・中・高)	大人	小人(小・中・高)	大人	小人(小・中・高)	大人	
小人(小・中・高)	875		2,490		150		3,515
大人	1,620		4,625		300		6,545
団体(30人以上)	(4) 240		(8) 465		0	(12) 705	
計	2,735		7,580		450		10,765

郷土館運営委員視察

品川・御台場

学校教育・社会教育関係者及び学識経験者で組織する郷土館運営協議会委員が研修で品川歴史館・寄木神社・御台場を視察しました。(3月27日)

三島との関わりの深い東海道第一番目の宿



品川歴史館

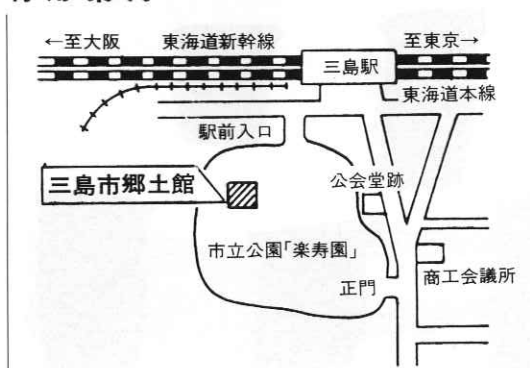
場・品川の品川区立歴史館の展示内容や運営、伊豆長八のこて絵細工が残されている寄木神社(品川区)、幕末の御台場遺跡(品川区)を視察見学し、今後の郷土館の運営や郷土史の学習に生かしていくことになりました。

品川歴史館……学芸員の方に、宿場町の様子・展示の苦心談や内容・資料管理の方法・歴史館の運営方法について視察研修。

寄木神社……本殿内側の2枚の扉に名工伊豆長八の手による漆喰こて絵を見学。天照大御神と猿田彦命を描かれていた。(品川区指定文化財)

御台場……幕末江戸品川沖にペリー来航を機会に江川担庵らの献策によって江戸湾防備のため築造されたもので7番完成(一部未完成あり)のうち現在ほぼ原型を残している第3番台場を見学した。第3台場は現在、都の史跡公園となっている。

利用案内



三島駅(南口)から徒歩5分。市立楽寿園内

休館日 毎月第2月曜・12月27日～1月2日

開館時間 午前9時～午後4時30分

入場無料(但し、楽寿園入場は、有料)

郷土館だより No.37

平成2年12月20日発行

(年3回発行)

編集 三島市郷土館

住所 〒411 三島市一番町19-3

TEL 0559-71-8228

発行 三島市教育委員会